

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 49 2018年8月

〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>



I N D E X

- 1996年に起きた在日帰国者一家の悲劇（小川晴久） 2
力なき者たちに力を(1)（木村 亮） 4
太永浩氏の本から教えられたこと（小川晴久） 8

★ 集会のお知らせ ★

日時：2018年9月1日（土）13:30～16:00

会場：人権ライブラリー（東京都港区）

講師：高英煥（コ・ヨンファン）さん（元・駐コンゴ北朝鮮大使館参事官など）※ウェブ中継での講演

演題：「米朝首脳会談後の朝鮮半島と日本（仮）」

参加無料・予約不要



1996年に起きた在日帰国者一家の悲劇

2018年7月7日集会報告



代表 小川晴久

去る7月7日、NO FENCEは、正面スクリーンに話し手が大きく映る形で、ソウルからのWeb講演（1時間45分）をおこなった。

講師は在日3世で神戸生まれの朴香樹さん。韓国の男性と結婚され、韓国で20年暮らしておられる。翻訳と通訳の仕事をされながら、脱北者支援のボランティア活動をされている。韓国のネットTVであるベナTVで、4月のNO FENCE総会で講演していただいた元在日帰国者で脱北者の金柱聖さんと二人で脱北者インタビューを続けている。

彼女が今回話された内容は、彼女の叔父（お母さんの弟）一家が、1996年ヨドック収容所に収監され、生死がわからないという、生々しい話であった。

1967年10月、叔父が北朝鮮に帰国

朴香樹さんのご両親が結婚されたのは、1967年。その年の8月12日、お母さんの弟（叔父）が17歳で単身、北に帰国。好きな女の子が帰国したからだという。

弟（叔父）から届いた最初の手紙は「バルーンがほしい」。それに乗ってでも……という、日本に戻りたいという意味だったという。

叔父は向こうで結婚し、70年代に3人の子どもが生まれる。上の2人は男。

1990年夏、朴香樹さんは神戸の朝鮮高校3年の修学旅行で北に行き、その時、元山に住んでいた叔父一家を訪問している。

1996年、2度目の訪朝

1996年夏、お父さんの勤務していた朝銀

関係者の訪朝旅行に、お母さんが一緒に訪朝することになっていた。しかし父親は、以前2度訪朝した時の印象が悪かったらしく、訪朝を拒否したので、彼女が代わりにお母さんをエスコートすることになった。

団体旅行の最終日、二人は叔父一家を訪問した。お母さんは30年ぶりに弟に会いたかったからだ。しかし弟（叔父）はおらず、家族だけが迎えてくれた。みな暗い表情であった。叔父は当局に検束され、家族だけが家にいた。

後でわかったことだが、この年の初め、日本の親戚から叔父宛に国際電話があった。年始のあいさつであった。日本の親戚のある叔父が、「金正日はそのうちにやられるよ。もう少しの辛抱だ」と話したらしい。

国際電話はすべて盗聴されている。北の叔父は黙って聴いていただけであったが、北の叔父に対する当局の調査が始まり、日頃の言動がすべてチェックされ、叔父は強制収容所に連行されたという。

下の娘（ヘギョンさん）は17歳になっていた。奥さんは47歳、長男は23歳、次男は21歳。長男は人民軍兵士、しかし栄養失調であった。次男は数カ月前に父が保衛部に連行されたことを、「ドイツのゲシュタポって知っているか」と表現していた。

朴さんの母親は、小銭以外のすべてのお金を次男に渡した。彼らと別れる時、元山港から船上の朴さんとお母さんを見上げる彼らの目は、「希望もなく、虚ろな目であった」。

彼ら一家は、その年の暮れか翌年の始め、全員がヨドック15号管理所に送られたとい

う。彼ら一家を含め、6家族（以上）が。

以後、朴香樹さんたちの親族の北の家族訪問申請は、すべて拒否された。

2006年、叔母とヘギョンさんは ヨドックで生きていた

2017年秋、一人の脱北者からメールが入った。叔父と親しかった在日帰国者が、2016年に脱北し韓国に亡命。ベナTVを見て朴香樹さんを知ったという。この人のおかげで、叔父が収容所に入れられ消えたきっかけ（上記の不用意な電話）を知る。

また別の脱北女性によれば、2006年時点で、叔母とヘギョンさんは、かなりやつれてはいたがヨドック収容所にいたという（その脱北者の親友が収容所で一緒だった）。

母の諦念と自分への励まし

近年、母はこう言った。「弟の一家は亡くなっているだろう。あなたは収容所に送られた数万、数十万の人たちのために活動しなさい」と。朴さんは3年前からハナ院で6カ月間ボランティア活動をし、脱北者定着支援活動をしている。

ベナTV「タルタルタル」での活動

今まで150人の脱北者の話を聴いた。1回につき2時間、思いのたけを語ってもらう番組が、タル(脱北者)タルタル(すっかり話す)だ。

脱北者の80%が女性。生計型脱北であったが、最近では自由を求めての移民型脱北が増えている。脱北者の3分の1が、本人か親族が収容所に入れられたという調査もある。

帰国事業で失踪した人々の調査

朴香樹さんには叔父一家の失踪事件があるからであろう。同じようなケースを調査し、北韓人権市民連合が国連人権理事会の強制失

踪者調査委員会にそれを報告する活動もしている。もちろん救出するためであるが、北当局に圧力をかけること、記録を残すことにも意義がある。

去る5月、彼女たちは調査のため来日したが、私たちNO FENCEや守る会は、在日帰国者の家族で、北に帰国した家族の行方がわからないケースを新しく紹介できなかった。

心をつかむ活動

12年間通った朝鮮学校の友人たちを念頭に、朴香樹さんは最後にこう言われた。「長い間沈黙を守っている。もう充分すぎるほど沈黙してきたんだから、これ以上沈黙しないでほしい。なぜなら、北朝鮮の人権改善の担い手は彼らなのだから。しかし行動してもらうには、彼らの心をつかまねばならない。人間は心から納得しないかぎり行動しないからである」と。朴香樹さんのこの指摘は聴衆の心に響いた。私たちが北朝鮮の人権活動のため動いているのは、それが私たちの心をつかんでいるためである。

1996年に起きた元山在住の帰国者一家（6家族以上）の悲劇はあまりに生々しい。叔父には何の罪もない。まして家族一家をヨドック強制収容所に送り込んだ血縁的連座制は、とうてい許されてよいものではない。彼ら一家の生死は今も不明である。

北朝鮮の恐ろしい強制収容所は、今もこのように機能している。板門店、シンガポールでのあの金正恩のパフォーマンスの背後で。この一家の救出と結合して、北の強制収容所の廃絶の必要性を、われわれNO FENCEは訴えていこう。

なお、朴香樹さんのこの訴えは、YouTubeで観ることができる。

<http://ur0.biz/LuLK>



力なき者たちに力を

(1) 「内政不干渉」論をめぐって



事務局長 木村 亮

「人間の問題を避けて通り、人間の隷属によってあがなわれさえするような軍縮の可能性をいまだにどうして信じられるのか、われわれにはもはや理解しがたい。

平和に関するあらゆる議論につねに人権を介入させることは、ただ状況を複雑化し相互理解の邪魔になるだけだという意見に出会うと——とりわけ、その意見が、あまりにも多くの自由を享受しているためにそれをどう扱ったらよいかわからないような人の口から洩れる時——、この地〔共産チェコスロヴァキア〕のわれわれのおそらくすべては、『人の言うことを聞かないものは救いようがない』という、あの無力感に陥るのである」——ヴァーツラフ・ハヴェル、1985年*1

平和ムードのなかで

南北・米朝対話により、朝鮮半島が平和に向かって進みだしたとする雰囲気、日本社会を覆い尽くしている。

この平和ムードに接して心底驚かされるのは、そこでいわれる「平和」という言葉の、あまりの底の浅さである。そこには、北朝鮮民衆の生命と自由に対する切実な関心は全く見られない。

北朝鮮に強制収容所が存在するかぎり、そしてそれに支えられた人権抑圧体制が続くかぎり、北朝鮮の民衆に平和な日々が訪れることはありえない。平和という言葉は、決して戦争の対義語にとどまるものではない。人道犯罪者の政権と仲良く共存し、そのプロパガンダをも真に受けることを、無邪気に「平和」と呼んで浮かれていてよいのか。立ち止まって考える必要がある。

南北・米朝対話が実際に実現したことは、北朝鮮の人権問題を議題から追放することだった。文政権とトランプ政権は、「核で人権を覆い隠す」金政権の戦略に乗せられ、あるいはそれを利用して、かの体制を温存することで、みずからの政治的実績を得ようとし

ているのである。

非核化も南北統一も、北朝鮮が人権抑圧体制を維持しつづけるかぎり、演出にしかならないことは明白である。最も優先されねばならない課題は、人権問題、わけても強制収容所問題である。

強制収容所は介入を要する

北朝鮮の強制収容所では、何の罪もない人々が、ただ現在の政治体制に逆らったと見なされただけで、凄惨な拷問と飢餓と奴隷労働にさらされている。その多くは釈放の見込みがなく、脱出の可能性もなく、そこに閉じ込められたままで生を終える。

完全な管理下で、圧倒的な力の差をもって行使されるこの暴力に対して、政治囚自身が抵抗することなど不可能である。のみならず、親族まで容赦なく送り込む強制収容所の存在そのものが、収容所外の北朝鮮民衆による異議申し立てを全く不可能にしている。

生命が脅かされ、人間としての最低限の自由と尊厳を剥奪され、そこから抜け出す希望が全く奪われている。抵抗しうる者は国内にいない。政府は彼らを保護するどころか、まさにその人道犯罪の実行者である。

だから、国外の誰かが介入しなければならぬ。そうでなければ、誰が彼らを助けるのか。想像力を働かせさえすれば、この結論から逃れることはできないはずである。

内政不干渉論の本質

このような主張への反論として必ず持ち出されるのが、「内政干渉すべきではない。北朝鮮のことは北朝鮮の人々に任せるべきだ」という決まり文句である。現今の「平和共存」ムードは、これを力づけるものであろう。

北朝鮮の人々がみずから十全に抵抗できるなら、それに任せるべきなのは当たり前である。それが不可能なまでに自由を奪われているから、外からの介入が必要なのである。

一見したところ当事者に優しいこの決まり文句を言う人たちが、当事者たる脱北者の訴えを真剣に受けとめているのを、私は見たことがない。この人たちは、強制収容所での拷問を止めさせることも、当事者にとって迷惑な「お節介」だと言うのだろうか。

もし北朝鮮に組織的な抵抗運動が姿を現したら、この人たちは同じことを言って支援を拒否するだろうか。それとも、当事者の運動だから支援するのだろうか。だとすれば先の決まり文句は、次のような不合理に行き着く。

「抵抗運動が不可能なほどに人権弾圧が苛酷なら、外の者は何もしてはならない。抵抗運動が可能なくらいに弾圧の苛酷さがゆるめば、外の者は何かすべきだ。人権弾圧が苛酷であればあるほど、手を差し伸べてはいけないのだ」

内政不干渉論を振りかざす人たちの本質的な誤りは、北朝鮮政府の「主権」と北朝鮮人民の権利とを同一視している点にある。

北朝鮮の現体制は、北朝鮮人民を正当に代表する国家ではない。強制収容所を根底に据えた言論封殺の体系によって、下からの異論

を徹底的に抑圧することで初めて成り立っているのである。その「主権」は人道犯罪者の主権である。人道犯罪者の主権に不干渉を貫くことは、声なき北朝鮮民衆を見殺しにする行為にほかならない。

内政不干渉論の心理

もっとも、内政不干渉論を口にする人たちが、本当にそれを確信しているのかは疑わしい。この人たちの多くは、常日頃、人権や民主主義や、民衆の国際連帯や歴史問題に、真摯に取り組んでいる。日本における人権や平和の擁護者が、北朝鮮体制への批判をためらう理由はいくつもある。内政不干渉論は、それに口実を与えているだけかもしれない。

たとえば、北朝鮮体制への批判は米日帝国主義を利するという「敵の敵は友」の心理。北朝鮮脅威論を理由に軍国的な改憲がなされることへの危機感。日本の保守・右翼勢力が拉致問題を契機にナショナリズムを煽り、左翼・リベラル叩きや民族差別をおこなってきたことへの反発。そして、日本の植民地支配と戦争犯罪という歴史の清算が置き去りにされることへの怒り。

それぞれに対する私の共感の度合いは様々だが、おおむね後に挙げた論点ほど、正当で重要なことだと考えている。そのうえでなお、北朝鮮の現体制に対する根底的な批判を怠ってはならないというのが私の立場である。ここではその説明として、最初と最後の論点だけをとりあげる。

人権の普遍性

帝国主義という用語を使うかどうかはともかく、北朝鮮の人権問題を批判することは、西洋型の価値観の押しつけであるという考え方があろう。私たちの価値観が普遍的で正しいものだと思ってはならない、というこの主張

は、一般的にはそのとおりだし、何か常識や思い込みから解き放たれて知的な高みに立ったかのような快感を、その主張者にもたらすものかもしれない。

北朝鮮当局もまた、「人権とは国権なり」という、人権概念そのものへの独特の理解をもって、国際社会からの介入をはねつけている。ここにあるのは、人権をめぐる理解の対立にすぎず、どちらが正しいとも言えないのだろうか。

しかし、強制収容所問題に関して、私たちは人権の普遍性と文化相対主義についての迂遠な論争にかかずらう必要はない。マイケル・ウォルツァーの一文を引けば充分であろう。

「もしわれわれが極限状況に対してのみ、大量殺人と大量の国外追放を阻止するためにのみ介入するのだとすれば、われわれが擁護しているのはXの規範でありYの規範ではないという考えは単純に誤りである。……その証拠に、すべての殺人者、すべての『浄化』遂行者がつく嘘は標準的かつ同一である。すなわち、彼らは自分たちのしていることを否定するのであって、自分たちなりの規範をもち出してそれを正当化しようとはしない」*2

北朝鮮当局は、強制収容所の存在を、単に否認している。その残忍さは、どのような理屈をもって道徳的に擁護できないと、みずからよくわかっているからである。このことは、数ある北朝鮮人権問題のなかで、とりわけ強制収容所問題を最上位の議題にすべき理由の一つである。

もちろんこのことは、強制収容所以外の人権侵害に関して、北朝鮮当局の人権概念を認めるべきだということではない。端的に言って、それは馬鹿げている。ミニマルな人権は普遍的なものであり、北朝鮮の人々も、それを知りさえすれば選び取るはずである。彼らには今、選択の余地さえ与えられていない。

強制収容所を廃絶することは、結局、現在の人権抑圧体制を終わらせることに行き着くだろう。これほど残酷な強制収容所さえなければ、北朝鮮人民が現体制への抵抗を始めるのは確実だと思われる。

民衆への責任

日本の植民地支配と戦争犯罪の清算は、北朝鮮の民衆に対して全くなされていない。

公式の戦後補償は、やはり政府間でなされなければならないだろう。しかし、独裁政権との間で「決着」をつけてしまうことは、韓国や東南アジアの経験が示すように、補償のあり方に大きな歪みと不徹底をもたらす。補償金は独裁政権の資金源となり、被害者をはじめとする民衆が置き去りにされる。民主化されて後によりやく、取り残されていた問題に光が当てられるが、保守派は「解決済み」の決まり文句で黙らせようとする。

戦後補償は、民衆に対しておこなわなければならない意味がない。現在の北朝鮮政府に、その誠実な代理人の役割を期待することは全くできない。人道犯罪に対する補償金が、人道犯罪の資金源になる可能性さえ小さくない。

原則からいえば、戦後補償は、民主化後の政権に対しておこなうべきだろう。だが他方で、これは実際の被害者が生きている可能性のあるうちに果たされなければならない。だから私は、日本政府による公式の補償はただちに開始されるべきだと思う。補償金の行方に期待は持てないが、少なくとも謝罪の姿勢は、公式報道を通じて伝わりうるからである。

しかし同時に、強制収容所の人道犯罪を終わらせるために介入する資格が、私たちにはある。資格というより、責務というべきだろう。罪もない北朝鮮の民衆がまさに今、拷問と飢餓と奴隷労働に苦しみながら、ゆっくりと大量虐殺されている。人道犯罪の歴史を学

び反省した結果が、今まさに起きている人道犯罪を黙認することなのだと思えば、その反省に何の意味があるのか。反省とは、二度とくり返さないということではないのか。

私には、北朝鮮人民の側に立って現体制の打倒をめざすことと、帝国主義日本の蛮行を批判しその補償を求めることとの間に、原理的な矛盾があるとは思えない。日本政府にも、そのような立場を取らせるべきとさえ考えている。私たちは、罪もない朝鮮人民に甚大な被害を押しつけた。だからこそ、罪もない朝鮮人民への拷問を座視できないのだと。

しかし現実には、戦後補償か体制打倒か、どちらかを選ばなければならない局面があるだろう。そうなれば私は、あらゆる批判を覚悟のうえで、後者を探るだろう。過去の人道犯罪は取り消しが効かないが、現在の人道犯罪は止められる可能性があるからである。

この問題は、いつか北朝鮮に言論の自由が花開いたとき、民衆自身に判定してもらうほかないだろう。いずれにしても、民主化後には戦後補償をやりなおすべきである。

正当な介入のレベル

北朝鮮の強制収容所を閉鎖するために、どのような介入ならば正当だろうか。

北朝鮮強制収容所の残虐さは、決してアウシュヴィッツに劣るものではない。その人道犯罪の巨大さと緊急性は、武力による人道的介入を呼び起こした例（ミロシェヴィッチのセルビア）、あるいはそうすべきであったと言われる例（ボスニア・ヘルツェゴビナ）にひけをとるものでもない。

私は、もし必要ならば、そして成功する見込みがあるならば、強制収容所を閉鎖するために北朝鮮に武力介入することは、正当でありうると思う。戦争は巨悪だが、戦争だけが巨悪ではない。戦争は犠牲をもたらすが、

宥和策はいっそう大きな犠牲をもたらすかもしれない。

仮に、たとえばアメリカ・韓国・日本がこのような介入をおこなおうとしても、中国・ロシアが拒否権を持つ国連安保理の承認は、まず得られないだろう。したがってこの介入は、単独行動主義にならざるをえない。これは国際法上、違法な侵略行為である。

しかし、違法だからといって、不正とは限らない。中国・ロシアは、北朝鮮当局の人道犯罪を明確に知りながら、己の利益のために黙認を決め込むのである。その両国の合意を得なければ、道徳的に正しい行為にならないのだろうか。

ここまで私は、「内政干渉」という言葉はかなり広い意味で用いてきた。それは、この言葉を金科玉条とする人たち自身がそうしているからであり、また実際にもそうするほうが便利だからである。しかし、この言葉の国際法上の意味は、国家による強制的な介入である（そこには武力介入も非武力介入も含まれる）。

私がいいたいのは、戦争すべきだということではない。国家による武力介入という、国際法で禁止されている内政干渉でさえ、北朝鮮の強制収容所を閉鎖するためなら正当でありうるということである。そうであるなら、武力によらない介入や、国際機関による介入、ましてや市民レベルの介入にさえ拒否反応を示すのは、もはや論外と思われる。それらは正当であるばかりか、「保護する責任」が命じる責務でさえあるといえるだろう。

戦争による解決を望まないなら、戦争によらない解決を考えなければならない。（続く）

【*1】ヴァーツラフ・ハヴェル『反政治のすすめ』恒文社、1991年、220ページ。

【*2】マイケル・ウォルツァー『政治的に考える』風行社、2012年、437～438ページ。

太永浩氏の本『3階書記室の暗号』から教えられたこと

代表 小川晴久

■金正日のダブル・スタンダード＝二枚舌

北朝鮮は1997年以降、国連人権委員会（後の人権理事会）で毎年のようになされる人権改善勧告決議に反論する時、西側帝国主義の二重基準（ダブル・スタンダード＝二枚舌）を一貫して主張してきた。自国に人権侵害がありながら、北朝鮮の人権侵害を強調する卑劣さを。

しかし、去る5月にソウルで刊行された元北朝鮮公使のこの本で、金正日は少なくとも2001年当初から外務省幹部に、西側に対応する時は二枚舌を使い、だましつづけよと指示していたことが暴露されたのは、本書の最大の功績であると思う。

2001年当時EUの議長国であったスウェーデンのペーション首相一行が平壤を訪問した。当時ペーション氏と金正日の通訳をしたのが太永浩氏であった。ペーション氏は全く議題になかった北朝鮮の人権問題を突然話した。「あなた方が核問題をいちおう解決しても、あなたの国には深刻な人権問題がある。これを解決しないかぎり、国際社会に迎え入れてもらえない」（大略。以下、同）

金正日は平然と答えた。「欧州と人権対話をしようとしても、残念ながら双方の人権概念が違う。しかし対話を重ねることは意義がある。人権に対する相互理解にプラスになるからやりましょう」

しかし金正日は晩餐会の後、外務次官の姜ソクジュを呼んで次のように指示した。「私はペーション総理に欧州との人権対話を約束した。人権外交をどのように引っぱっていくか研究しなさい。欧州が人権対話をしようというのは、結局われわれの内部を掘り崩そうとするものであって、絶対に許容することはできない。人権は国権である。しかし対話しなければ、欧州が猛威をふるうこともある。欧州との関係をよく維持すれば、米国の強硬保守派を抑え込むことができる。だから、欧州をだまし、かわす対策を研究しなければならない。われわれが米国との対話を通してジュネーブ核基本合意文をつくらなかったら、どうして危機を乗り越え今まで持ちこたえることができたであろうか。人権問題も国際共同体（EUのことか）をだましかわす方向で接近してみなさい」と。

外務省が検討しだした建議書の骨子は次のようであった。「まず、予備接触と人権専門家養成のための交流を主張しつつ、人権対話の進展を遅延させる。こうして何年か時間を引き延ばす。しかし長期的見地では、遅延戦術だけ使うわけにいかないので、外国人だけに見せることのできる法院、監獄、囚人たちを今から準備する。将来条件が熟したら、司法施設も見せるようにして徐々に進む。万一米国とEUが連合して人権攻勢に及んだ場合、核実験のような超強行措置を取る必要がある。彼らの視線を核問題に集中させること。われわれが核危機を高調させれば、米国も仕方なく、“先核、後人権”方式に立たざるをえなくなる。核で人権を覆い隠すことだ」（177～178ページ）

二重基準＝ダブル・スタンダード＝二枚舌は、金正日の指示であった。金正日の十八番であった。核問題でも欺瞞戦術が使われていたことが、2001年の金正日のこの時の発言で立証された。彼の指示・指導で外務省が建議した案は、時間稼ぎと、核で人権問題を隠す「先核、後人権」方式であった。北の内部を知る太永浩氏のこの暴露の意義は、とてつもなく大きい。

■北は奴隷制国家である

いま一つは、本書の後半第2部で主張している、北朝鮮は奴隷制国家であるという主張である。外交官はもちろん、政府の要人も、全国各界各層の指導者も、構成員も、すべての人が真実を語ることに、奴隷を解放することであると宣言されている。

私は朝鮮半島の統一とは、北で民主主義が実現しないかぎり無理と考えてきたので、もう少し先のことと考えてきた。しかし太永浩氏のこの見解は説得力があり、納得した。この意味であれば南北の統一はすぐにでも達成されねばならない。

なお、太永浩さんのブログができており、韓国語、中国語、英語で、氏の見解を見ることができ。 <https://thaeyongho.com/>

NO FENCEとしては、北朝鮮の強制収容所廃絶のロード・マップをつくりながら、太永浩氏と交流し、対話を重ねていきたいと願っている。